

# 日本語のメール・手紙文末における 「マデ」の意味機能

小原佳那子

## 1. はじめに

本稿は、日本語のメール・手紙文末に現れる「マデ」の意味機能の考察を目的とする。考察の対象となるのは以下のような例である。

- (1) このたびは、文孝くんが難関の〇〇小学校に合格なさったとのこと、ほんとうにおめでとうございます。受験を知ったときには、正直心配な気持ちもありましたが、文孝くん自身が目標を持って努力する姿を見て、心から応援していました。

小学校は社会生活への第一歩です。国語や算数の勉強もさることながら、たくさんの体験と触れ合いを通して、自分の体で学んでいってほしいと願っています。

まずはよかった。とり急ぎお祝いまで。

(大事典：159)

当該の形式は「まずは～まで」「取り急ぎ～まで」という形で、メールや手紙の結びの文として現れる。この形式は、これまで定型句とされるのみで、使用実態やマデがどのような意味機能を有しているのか等、詳細な記述はなされていない。村上(2012：189)では、この形式について以下のように説明される。

- (2) 「用件はこれだけです」と、メール内容を簡潔に表す結びの表現。

しかし、「ダケ」・「ノミ」のように排他的な意味機能をもつ「限定」を表す助詞で(3)のように換言すると非常に失礼な表現となる。

- (3) まずはお礼だけ。／取り急ぎお願いのみ。

ダケ・ノミを用いた場合、書き手が書いたことが「お礼」「お願い」に限定され、それ以

上のことは述べない。その結果、失礼な表現になると考えられる。以上のようなことから、当該形式のマデは「限定」を表しているのではないと言える。しかし、定型句でありながら、場面や相手に制限がないわけではなく、丁寧さを上げるため（4）のように換言することがある。

（4） まずはお礼申し上げます。 / 取り急ぎお願い申し上げます。

つまり定型句としてマニュアル化されながら、実際には使用場面が限定される点が問題であると言える。本稿では当該の形式が定型句として使用可能である一方で、丁寧さに欠ける表現となる原因はどこにあるのか、マデに注目し考察する。

## 2. 使用実態の調査

（1）のような形式の使用実態を探るため、年代別にアンケート調査を行った。

### 2.1 調査対象

今回は、年代差における使用実態の相違を調査するため、20代～50代までを対象とした。職業は、一般事務、教員（高校・大学）、会社員（管理職）となっている。内訳は表1の通りである。

表1 調査対象内訳

年代	人数	男女別内訳	計
20代	4名	男性：0名 女性：4名	22名
30代	11名	男性：5名 女性：6名	
40代	3名	男性：2名 女性：1名	
50代	4名	男性：3名 女性：1名	

### 2.2 調査方法

アンケートでは4つのメール文を提示し、不自然さを感じた箇所を訂正するよう指示した。調査にあたっては、当該項目のみに注目しないよう、複数箇所に敢えて違和感のある表現を入れ、全体を見て訂正するよう指示した。

4つのメール文は、先の実例等を参考にし、当該形式が用いられると考えられるケースを

想定した上で作成した。メールの内容は、具体的には、①お見合いを断るメール、②飲み会のお知らせメール、③取引先への催促メール、④同僚へ時間変更連絡のメールとなっている。これらは、それぞれ①③は送信者が一般的に情報を伝達しにくいと考えられるケース、②は様々な年齢の受信者へ情報を伝達し、さらにその返信を要求するケース、④は情報の伝達メールであり、返信は不要だが送受信者が同期入社と同僚というケースとなっている。これらのメール内容は、今回の調査が年代別での使用実態を探るものであるということを考慮し、できる限り様々な伝達内容、送受信者の年齢や性別、立場も異なるものを想定した上で、以上4つのパターンのメール文を提示することとした。

また、送受信者間の関係も考慮した上で訂正するよう指示するため、それぞれのメール文には、送信者や受信者の年齢・性別・立場も明示している。

アンケートの例文は以下の通りである。

#### (5) お見合いを断るメール

・送信者→女性（20代後半）、受信者→会社の上司（50代）

---

件名：先日のお見合いの件

このたびはいろいろご配慮いただき、心より御礼申し上げます。

あの後、しばらくお話を伺いましたが、ご両親との同居を強く希望されているようです。しかしながら、私も病弱の父を抱える身で、ご意向には添えません。誠にわがままな申し出ですが、今回のお話はなかったこととしてください。

とり急ぎ、お返事とおわびまで。

### 2.3 調査結果

本調査では2.2で述べた通り、4つのメール文を提示しているが、それぞれのメール文において、多数の訂正箇所が挙げられた。本稿では、まず、2.2で述べた①お見合いを断るメールのみを調査結果として提示する。

(5)のメール文の文末「マデ」を訂正した人数は、22名中13名であった。訂正例と訂正理由は、以下表2の通りである。なお、類似した回答は回答例として1つ挙げ、訂正理由を明記している。

表2 「マデ」の訂正例と訂正理由

	訂正例	訂正理由（年代・性別）
「まで」の部分を訂正した例	とり急ぎ、お返事とおわびのご連絡を申し上げます。	目上の人に対して省略するのは失礼。(20代・女性)
	メールでのお返事で大変恐縮ですが、とり急ぎご報告させていただきます。	上司への報告は、本来直接お会いして伝えるべきであるため、メールでの回答を詫げるべき。(50代・男性)
「とり急ぎ」の部分を訂正した例	お返事とおわびまで。	本来丁寧に送るべきメールでは、よほど差し迫った事情によりメールが丁寧に書けていない場合を除いては、「とり急ぎ」を入れる必要はないため。(30代・女性)
	略儀ながら、お返事とおわびまで。	「おわび」なのに「とり急ぎ」では、誠意が感じられないため。(30代・男性)
「とり急ぎ～まで」をすべて書き換えた例。	簡単ではございますが、メールで失礼させていただきます。	「とり急ぎ」は上司に対して、仕事等で使う言葉。(50代・男性)
	本当に申し訳ありません。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おわびまで」とあるが、おわびを表す言葉がないため、謝りの文言に変えた。(20代・女性)</li> <li>・敬意不足と感じた部分のため、書き換えた。(40代・男性)</li> </ul>
	今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしく願いいたします。	やや不躰、丁寧さが足りない感じがしたから。(30代・女性)
	本来ならば直接お話しすべきことを、このような形をとりますことをお許し下さい。	そもそもメールでこの件を伝えることに疑問。(30代・男性)
	ご配慮いただき、ありがとうございました。	重大なことがらなので、「とり急ぎ」返事すべき内容ではない。(30代・男性)
	また、先方の方にもくれぐれもよろしくお伝えください。	相手にお礼を入れる。(50代・男性)
	まずは、お詫びかたがたお返事申し上げます。	配慮していただいた上司への回答なので最後まで丁寧語とするのがよいと思われる。(50代・男性)
「とり急ぎ～まで」を削除した例	この場面でのこの文言は書かない。(30代・女性)	

また、アンケート後、当該形式の使用に関する意識調査を目的にアンケートを実施した(表3)。

表3 使用に関するアンケート結果

(1) 「取り急ぎ～まで」「まずは～まで」のような定型句を普段使用するか。		
はい：12名		いいえ：10名
(2) (1) で「はい」と回答した人を対象に ①どのような時に使用するか。		
仕事：2名	私的：1名	両方：9名
②送る相手を選ぶか。		
はい：12名		いいえ：0名
③どのような相手に使用でき、使用できないのか。		
使用できる相手	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その後継続報を送る可能性がある人</li> <li>・社交辞令的に早急な連絡をする人</li> <li>・早急に結果を知らせる人</li> <li>・目上の人</li> <li>・あまり親しくない友人</li> <li>・親しい人</li> </ul>	
使用できない相手	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親しい友人</li> <li>・目上の人</li> </ul>	

### 3. 使用実態から見られる問題の所在

2の結果から、次の問題が明らかになった。①当該形式が失礼な印象を相手に与える原因はマデにあるという点、②当該形式は使用場面に制限があるという点、③当該形式は使用できる相手に制限があるという3点である。①に関しては、表2で文末を換言している点から、その原因はマデにあると指摘することができる。

以上のことから、マデに注目し、上記3点の問題について考察を行う。

## 4. 「マデ」の意味機能からみる、メール・手紙の文末形式

マデは、その意味機能から、一般にとりたて助詞と格助詞に分類される。当該形式のマデの意味機能について、両者の観点から考察していく。

### 4.1 とりたて助詞としての「マデ」・格助詞としての「マデ」

まずは、とりたて助詞・格助詞としてのマデの特徴について概観する。以下日本語記述文法研究会（以下、「記述文法」）（2009b）の例を挙げる。

- (6) デモには子どもまで参加した。 (記述文法 2009b：62)
- (7) 苦情は相談窓口までお問い合わせください。 (記述文法 2009b：61)

(6) のようなマデは「とりたて助詞」に分類され、その意味機能については、沼田(2000)や記述文法(2009a)等で述べられる。このマデは、ある事象に関して想定しうる要素を、話し手が「実現可能性」の程度で順位付けし、実現可能性が最も低いと評価した要素をマデでマークし、それが「極限」であることを明示する機能を持つ。要素同士を比較し、順位付けを行うため、マデが後接した要素以外の要素が含意として現れる。

一方(7)のようなマデは「格助詞」に分類され、「範囲の終点」を表すとされる。記述文法(2009b)では「とりたて助詞の『まで』は、前にくる名詞が、想定される範囲の中での極限の存在であることを意味するが、格助詞の『まで』には、そうした評価的な意味はない。」(記述文法2009b:62)と述べられる。つまり、想定される要素を話し手は評価しないため、マデでマークされた要素以外の要素については関知しない<sup>[1]</sup>。確かに(7)では、「相談窓口」以外の要素を含意として解釈することは極めて難しい。よって、格助詞のマデは「範囲の終点」を表す機能を持つと言える。

## 4.2 メール・手紙文末に現れる「マデ」の意味機能

4.1を踏まえ、当該形式のマデの意味機能について考察する。

(8) 拝啓 貴社ますますご盛栄のこととお喜び申し上げます。

さて、○月○日付でご請求申し上げました「CC550」40個の代金につきまして、お支払期限を過ぎた○月○日現在、いまだご送金を確認できておりません。

何かの手違いかと存じますが、ご調査の上、至急ご送金くださいますようお願い申し上げます。(中略)

取り急ぎ、お願いまで。

(文書:78)

当該形式を用いる際、書き手は正式な文章の手順(例:挨拶→伝達事項→伺い→締めの挨拶)を想定した上で、途中にある要素((8)では、「送金してほしい」という伝達事項)をマデでマークしていると言える。このように、書き手が踏むべき手順を順に並べた上で、途中にある要素をマデでマークするため、それ以外の要素が含意されると考えられる。その結果、「正式な文章として書くべきことは承知しているが、やむなくここで終わる」という意を表明することになる。以上のことから、当該形式は本来であれば書くべき締めの挨拶等を省略したことを含意することになり、結果としてそれが受け手に「ぞんざいな印象」を与える要因になると考える。この点は、とりたて助詞と類似していると言えるが、異なる点も見られる。

4.1の通り，とりたて助詞のマデは，要素を「実現可能性」という基準で評価，順位付けをし，最たるものを「極限」とする。だが，当該形式のマデは正式な手順に則り，書くべきことを順に並べ，要素のひとつをマデでマークしてはいるが，「実現可能性」という基準でそれぞれの要素を比較しないため，その最たる要素をマデはマークせず，「極限」の意も表さない。この点がとりたて助詞のマデとの相違点であると考ええる。

このように当該形式のマデは，とりたて助詞の機能を有する一方で，文章の正式な手順を順に並べ，途中の要素をマデでマークすると仮定すると「範囲の終点」を表す格助詞のマデにも類似していると言える。当該形式は「正式な手順は承知しているが，敢えてここで終わる」ことを表明するため，マデでマークした要素以外の要素が含まれる。しかしながら，格助詞のマデは「極限」の意味を表さず，マデでマークした要素以外は関知しない。この点が格助詞のマデとの相違点であると言える。

ここまでの考察から，当該形式のマデは，とりたて助詞のマデの「要素を順に並べ」「他の要素を含意として表明する」という機能と，格助詞のマデの「範囲の終点を表す」という機能を持ち合わせていると考えられる（図1参照）。

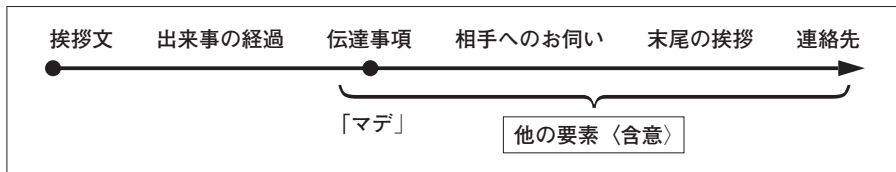


図1 メール・手紙文末に現れるマデ

以上から，メール・手紙文の文末に現れるマデの意味機能は，とりたて助詞・格助詞のどちらの意味機能とも深く関連していると言え，このことはさらに，とりたて助詞としてのマデと格助詞としてのマデは，大きく異なるものではないということを示唆するものであると考える（表4参照）。

表4 とりたて助詞／格助詞のマデと当該形式のマデとの関連性

	他の要素	要素の順序付け	要素間の評価	マデの意味
とりたて助詞	○	○	○	極限
格助詞	×	×	×	範囲の終点
文末形式のマデ	○	○	×	範囲の終点



## 5. メール・手紙文末形式の運用制約

当該形式が、「ぞんざいな印象」を与える要因は4の通りだが、それでも定型句となるのは、使用場面が限定されるためであると言える。当該形式が「取り急ぎ／まずは」と共起する点から「緊急で、返事を要しない」「すぐ後に続報を送る」場合に使用場面が限られると言える。事例を検討してみても、「お祝い」「案内」「勧誘」「催促・督促」等にこの形式が用いられ、これらは「いち早く伝達したい」（お祝い／催促・督促）場合や、「すぐに詳細を伝達する」（案内／勧誘）場合である。つまり、書き手の「正式な手順は承知しているが、〈緊急性があるため〉取急して途中で終わるが、すぐ続報を送る」ということの表明になり、結果的に制限を設けながらも、定型句として認知されていると言える。

しかし、定型句として認知されてはいるものの、先述した通り、書き手の「正式な文章として書くべきことは承知しつつ途中で終わる」ということを表明するため結果的にぞんざいな印象を与えることになるため、どのような相手にも使用することが可能であるとは言いにくい。実際、今回の調査結果にも「使用する相手は選ぶ」という回答が多くあった（表3参照）。以上のことから、手紙やメールの書き手と受け手との「社会的立場」などによって、使用しにくい相手が存在する点があげられるため、当該形式は使用する相手にも制限があると考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

考察の結果、次の3点が明らかになった。「まずは～まで」「取り急ぎ～まで」という形式は、①メール・手紙文の正式な手順の途中で終わる、すなわち、正式な手順（範囲）の終点を表す。②そのため、「ぞんざいな印象」を与えるため、使用場面や使用する相手に制限が生じる。③当該形式のマデは、とりたて助詞・格助詞の意味機能と深く関わり合い、両者の意味機能を有していると考えられる。

本稿では、アンケートで用いたメール文の内、ひとつのみを結果として提示した。このメール文において設定したメールの送信者と受信者の関係は、いわゆる社会的な立場が比較的明確なものであったため、当該形式を不適切とらえたインフォーマントも多くいたと考えられる。しかしながら、使用実態を調査するアンケート（表3）に見られる通り、使用できる相手／できない相手にはそれぞれ「目上の人」「親しい人（友人）」が挙げられている。このことはつまり、いわゆる社会的立場のみで使用できる相手が決定されるということではなく、当該形式を用いる内容・状況も関係していると考えられる。上記②の使用する場合や相手に制限が生じるという点において、本稿では提示していないメール文に関しても再度詳細な検討を行い、当該形式の使用条件について検討すべきであると考えられる。



また、この形式は、ビジネス日本語のテキスト等に多く掲載されている。しかし、上記のような特徴を有しているため、定型句となつてはいるが、使用には注意を要するということが指摘することが、特に非母語話者向けの教材・指導において必要ではないかと考える。具体的な教材・指導法に関しては今後の課題としたい。

#### 注

- [1] 寺村（1991）では、「飛行機で仙台まで行く」という例文について、「〈仙台からは別の手段で行く〉可能性を感じさせる」（寺村 1991：115）と述べ、格助詞のマデが他の要素を含意する可能性を示唆している。

#### 参考文献

- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版  
日本語記述文法研究会（2009a）『現代日本語文法5 とりたて・主題』くろしお出版  
日本語記述文法研究会（2009b）『現代日本語文法2 格と構文・ヴォイス』くろしお出版  
沼田善子（2000）「第三章 とりたて」『[日本語の文法2] 時・否定と取り立て』（金水敏・工藤真由美・沼田善子）pp. 151-216 岩波書店  
村上英記（2012）『「きちんとした敬語と表現」がすぐに見つかる ビジネスメール言い換え辞典』日本実業出版社

#### 用例の出典

- 文書：奥村真希・安河内貴子（2007）『日本語ビジネス文書マニュアル』アスク出版  
大事典：主婦の友社（編）（2008）『手紙・はがき・文書・メール文例大事典』主婦の友社

（こはら かなこ 学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員）

# The Meaning and Function of Formal Letter Closing “*made*” in Japanese

Kanako KOHARA

## Abstract

For this paper a study was conducted of the actual use and the function of *made*, which has been used in the past as the fixed phrase at the end of a letter or an e-mail written in Japanese. The results of the study show there is a great difference among generations in actual usage of and the attitude towards using the *made*. Further, the *made* suggests that it has an intermediate function of meaning in association with both *made* of focus particles and case-marking particles.

From the above facts, the paper advocates that the form of the *made* is not dealt with sufficiently in business manuals and that it contains important issues concerning the teaching methods, not only to native Japanese speakers but also to foreign adult learners of Japanese.

**Key words** : *made*, focus particles, cases-marking particles, formal letter closing “*made*” in Japanese.